

研究論文 (Articles)

大型地域災害時ノンプロ外部支援者を対象とした 支援前後ケアの検討

——外部支援者の揺らぎと育ちに注目して——

深谷 弘和・山本 耕平

(立命館大学大学院社会学研究科・立命館大学産業社会学部)

A Study of Care for the Nonprofessional Supporters During Large Regional Disaster

FUKAYA Hirokazu and YAMAMOTO Kohei

(Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University/
College of Social Sciences, Ritsumeikan University)

The Tohoku earthquake that occurred on March 11, 2011 brought unprecedented damage to Japan. After the earthquake, a lot of supporters, both groups and individuals, entered the disaster area, and have continued to support activities to date. These supporters from all over the country include not only professionals such as Self-Defense Forces personnel, doctors and nurses, but also nonprofessional people who were uninformed about the disaster support. We conducted a survey via interviews to 14 supporters working at social welfare facilities and went into the disaster area as outside supporters. Through an analysis of this survey, this paper studies the mental care to be offered to nonprofessional supporters before and after they go into the disaster zone.

Key Words : the Tohoku earthquake, disaster supporters, critical incident stress, care for supporters
キーワード : 東日本大震災, 支援者, 惨事ストレス, 支援者ケア

1. はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、地震に加えて津波、原発事故によって未曾有の被害を日本に与えた。震災発生後、外部から様々な組織や団体、個人が被災地に入り、現在もおお支援活動は続いている。

阪神・淡路大震災以降、被災者の惨事ストレスに加えて、二次的外傷性ストレスを代表とす

る外部支援者の惨事ストレスが指摘されるようになり(中井, 1995など)、わが国でも惨事ストレスに対する外部支援者へのケアの在り方が検討されてきた(加藤・飛鳥井, 2003; 加藤, 2004; 大澤, 2010)。その検討は、消防士や自衛隊員などの日常から惨事ストレスに対する教育を受けている専門職から、看護師などケアチームとして被災地に入る専門職に対するものへと広がりをみせている(深澤・山田・石岡・佐藤・込田, 2006; 大澤・中島・村上, 2011)。大規模

災害が発生した際、被災地に支援に入るのは、惨事ストレスの対策が講じられている専門職に加えて、災害ボランティアなどの外部支援者も含まれている（清水，2000；似田，2008；三井，2008など）。しかし、このように災害支援の専門職ではない「ノンプロ」外部支援者に対する支援前後のケアについての議論は少ない¹⁾。

今回、筆者らはJDF（日本障害フォーラム）の要請を受けた障害者団体の支援者派遣に携わり、東日本大震災の被災地に派遣されるノンプロ外部支援者に対して事前教育を含めた派遣前のケアと支援から帰任してからのケアに従事してきた。

本稿は東日本大震災のような大型地域災害時に、普段から惨事ストレスなどの教育を受けていないノンプロ外部支援者に対してどのような支援が必要であるかを、実際に被災地支援に入り、帰任した支援者へのインタビューを通じて検討することを目的としている。本稿での検討は、ソーシャルワークの視点からの検討である（山本，2007；2008）。彼ら・彼女らは普段、障害者施設で障害のある人たちの支援実践に従事しているため、派遣により経験した被災地での支援経験が普段の支援実践にどのような影響を与えたのかを検討する必要がある。検討にあたっては、外部支援者の支援前から帰任までのプロセスの中で経験する精神的な変化を尾崎（1999；2000）がソーシャルワーク論の中で指摘する揺らぎとして捉え、この揺らぎに伴う支援者の成長の側面を育ちと表現して注目し、今回実施した事前・事後教育がどのように影響したのかを彼ら・彼女らの語りから分析した。

本稿では、まず筆者らが実施した派遣前のケアと帰任後のケアの内容を紹介する。次に、実

施したインタビュー調査の概要と、分析結果を示す。最後に、インタビュー結果と今回筆者らが実施した支援前後ケアを踏まえながら、大規模地域災害時のノンプロ外部支援者のケアの検討をおこなう。

2. 外部支援者派遣における取り組み

2-1. 派遣前のケア

ノンプロ外部支援者への支援前後のケアを検討するにあたって、筆者らがインタビューを実施した2011年8月までに、被災地への派遣のためにおこなってきた取り組みを整理しておく。

まず、大規模災害時の支援をする際の教育を日頃から受けていない外部支援者に対して、支援にあたっての被災地の情報、被災地支援における注意点、支援方法などを文章化し、『支援の手引き』としてテキスト化した。テキストでは、先に被災地に入った支援者からの情報をまとめ、必要な服装や持ち物まで具体的に記すようにした。さらにPsychological First Aid (National Child Traumatic Stress Network and National Center for PTSD 2006；以下PFA)²⁾に基づいて、大規模災害時における支援活動の学習を目的とした文章を記した。この『支援の手引き』は、2011年8月までに3回の改訂をおこない、被災地の状況の変化と共に内容を更新し、外部支援者に配布した。

作成したテキストをより効果的に活用し、被災地支援に対する漠然とした不安を解消することを目的として、派遣する外部支援者を対象に事前学習の場を設けた。ここではPFAに関する講義、そしてすでに被災地に入った支援者による状況の説明を丁寧におこなった。また、支

1) 本稿では、普段から災害支援に関する教育を受けていないことを「ノンプロ」と表記している。これは一般的な災害ボランティアの中でも、普段、災害支援以外の何らかの支援に従事する専門職とそうでないボランティアを区別するためである。

2) PFAは、災害精神保健に関する、さまざまな領域の専門家の知識と経験、および多くの被災者・被害者の体験から、アメリカ国立PTSDセンターと、アメリカ国立子どもトラウマティックストレス・ネットワークが開発した災害、大事故などの直後に提供する心理的支援のマニュアルである。

援前の不安や気持ちの変化は、当然、生じるものであり、被災地支援に入っても不眠など、何らかの形で心身の変化が起きる可能性があることに対する理解を促した。そして、今回の派遣が組織による派遣であり、それぞれ1週間の支援活動が、引き継がれていくことを強調し、1週間で必ず帰任するよう促した。加えて、派遣にあたっては家族と職場の承諾を確実に得ることを求め、職場でも帰任後に1週間程度の休暇を受けることができるように派遣する側である職場に求めた。

2-2. 派遣後のケア

被災地支援から帰任した職員を対象として『支援から帰られた職員の皆さんへ』というテキストを作成した。ここには惨事ストレスへの理解を促す内容に加えて、ストレスチェック項目を設けて、帰任後、何らかの心身における変化が生じた際に設置した窓口にご相談できる体制を同時に整えた。また、テキストの中で被災地支援からの帰任後は通常の勤務への復帰までに1週間程度の休暇をとるように、本人と職場の管理職に促す文章を記した³⁾。

さらに、すでに帰任している支援者を対象にして帰任後学習会を実施した。ここでは、惨事ストレスの状態や対処に関する講義を実施し、それぞれの支援活動を振り返り、評価できるようにした。そして、それぞれ外部支援者としての活動を労う場を設定した。

3. 方法

それでは、今回実施したインタビュー調査の概要と調査方法について示す。

3) 作成したテキスト『支援の手引き』と『支援から帰られた皆さんへ』は、「立命館大学 山本耕平研究室」のホームページで公開した。
<http://www.ritsumeij.ac.jp/~kohei-y/lab/>

3-1. 対象者

今回のインタビュー調査の対象者は、JDF（日本障害フォーラム）の支援要請を受けて、X県支部・センターから被災地に派遣された障害者施設職員14名である。JDFは被災地の障害を持つ人の置かれている状況を受け、岩手、宮城、福島に支援センターを立ち上げ、支援者を派遣し、施設の再開に向けた支援、自宅へのアウトリーチ活動をおこなうための体制を整えてきた。全国から派遣される障害者施設職員は約1週間の活動をおこない、それぞれの地域に帰任している。対象者の属性の詳細は表1に示す。

表1 調査協力者一覧

ID	性別	年齢	派遣時期
A	男	44	3月下旬
B	男	40	4月中旬
C	男	41	4月中旬
D	男	38	4月下旬
E	男	32	5月上旬
F	女	48	5月上旬
G	男	33	5月上旬
H	男	52	5月中旬
I	男	33	5月下旬
J	男	32	5月下旬
K	男	28	5月下旬
L	男	52	6月上旬
M	男	45	6月上旬
N	男	31	6月上旬

3-2. 手続き

最初に、筆者らが実施した被災地支援の帰任後学習会でインタビューの趣旨を参加者に説明し、調査協力に同意した方に登録してもらった。後日、日程を調整して、インタビューを実施した。インタビューは約1時間で、質問内容は半構造化し、「被災地支援の入る前と被災地に入るまで」、「支援活動中」、「帰任後」について振り返ってもらいながら、インタビュー協力者には自由に語ってもらった。インタビューは、精神保健

福祉士資格を持つ研究者が2名でおこなった。

3-3. 分析方法

分析には修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA）を参考にした。木下（2003）は M-GTA に適した研究として3点挙げている。1点目は、人間と人間が直接的にやり取りをする社会的相互作用に関わる研究であること。2点目は、ヒューマン・サービス領域であること。3点目は研究対象とする現象がプロセス的性格をもっていることである。本研究は、被災地への支援に入る前、被災地での支援中、被災地からの帰任後といったプロセスの中で外部支援者が経験する揺らぎや育ちに注目

していくことを目的とし、障害者福祉施設の職員を対象としているため、M-GTA が有用であると考えた。

分析テーマは「大規模地域災害におけるノンプロ支援者が被災地においてどのような揺らぎや育ちがみられるのかをプロセスとして明らかにし、支援前後ケアを検討する」と設定した。この分析テーマに基づいて、分析の最小単位である【概念】に基づいて、トランスクリプトから語りを切片化することなくヴァリエーションを収集し、【概念】間の相互関係を検討した上で<カテゴリー>を生成し、文章化をおこなった（表2）。最終的には相互関係をプロセスに基づいて図式化した（図1）。これらの分析作業にあ

表2 分析ワークシートの例

カテゴリー	被災地での揺らぎと向き合い、外部支援者としての思い
概念③	被災者の優しさ・たくましさの発見
定義	被災者との出会いの中で、被災者の復興への強さやたくましさなどに出会う時がある。被災地の日常から、そういった面を見出したときの心情の変化
ヴァリエーション (具体例)	みんな協力してやってはったですし、衣類とかね、その辺とかすごく、何ですかね、やっぱり前向きに生きてるといようなものが感じられましたし、すごくやっぱり、みんなね、被災してしまったところでは協力して…
	電気屋さんの前に洗濯機置いとって自由に使ってくださいとか、魚屋さんの前に避難してる方は無料で焼きますみたいな張り紙してあったりとかね、やっぱり前向きに生きていこうという力強さは感じましたね。
	やっぱり、素直に感謝もしましたし、自分たちが大変なんやけども、やっぱり、何ていうか、どんなときでも人に対して優しくできるんやなというか、こんなときやから余計にそういうふうな気持ちというのは出てくるのかなというふう思ったんですよ。
	真逆なことを言うのかもしれないですけど、人間、強さであるとか、強みかな、そういうのがどんな状態でも上に上がっていこうという思いとかはあるんやなというのと、周りに対する、自分をさておいて周りに対する優しさみたいなんはすごく、何か人間って持つてるんやなというのは思いましたね。
	自分は何もしてないと思うんですけどね。その方たちがやってるのを、逆に、ああ、だから人間ってたくましい、ある意味たくましいんやなと感じましたし。 …
理論的メモ	障害者施設で働いている職員だからこそみられるストレングス・エンパワメントの視点ではないか 外部支援者としての学びや心がけることとして概念4「外部支援者としての思い」と通ずる部分もある

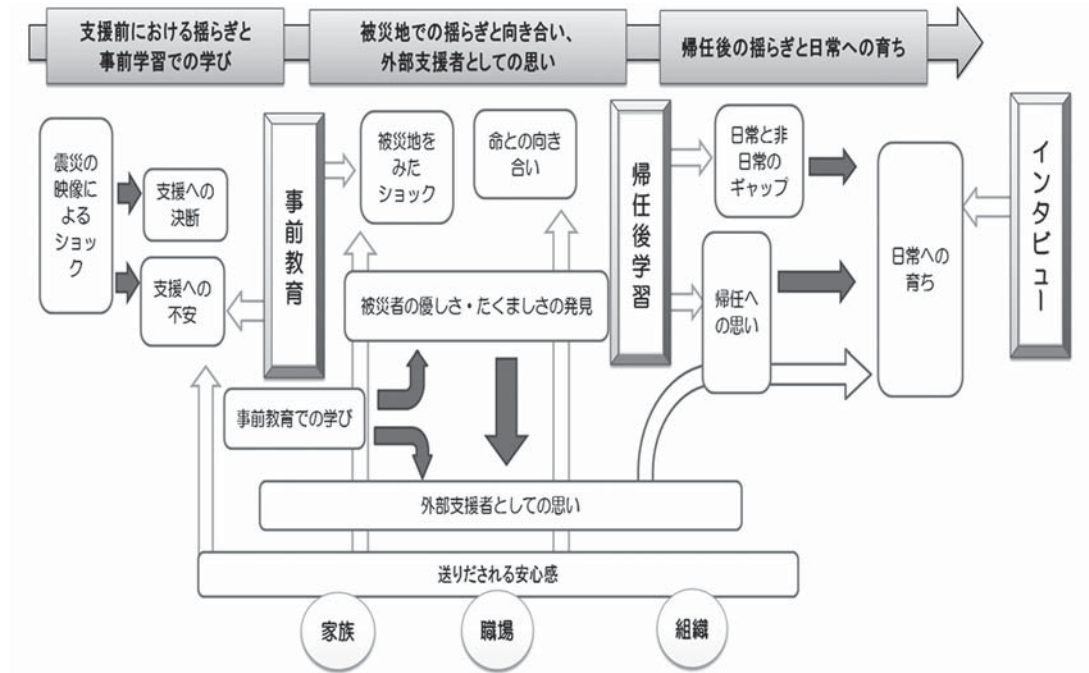


図1 ノンプロ外部支援者の揺らぎと育ちのプロセス

たっては、多くの質的分析に携わってきた研究者2名にスーパーバイズを受けた。

3-4. 倫理的配慮

インタビュー開始前に、研究者の連絡先を明記した「研究倫理に関する誓約書」によって、①匿名性が担保されること、②協力者の不利益になることなく研究の協力拒否がいつでもできること、③研究データが学会報告、学会誌、研究結果をベースとした著書・研究論文にて使用されること、④研究結果がまとまり次第フィードバックをおこなうことの4点に同意してもらった。また、「立命館大学研究倫理指針」に基づいて調査をおこなった。

4. 結果

M-GTAによる分析をおこなった結果、12の【概念】が生成された。その12の【概念】の相互関係から大きく3つの<カテゴリー>が生成

された。この<カテゴリー>は、支援に入るまでから帰任するまでのプロセスの中で、<支援前における揺らぎと事前教育での学び>、<被災地での揺らぎと向き合い、外部支援者としての思い>、<帰任後の揺らぎと日常への育ち>となった。

【概念】および<カテゴリー>の検討の際に本研究で使用したワークシートの具体例は、表2に示す。そして、【概念】および<カテゴリー>間の相関を示したのが図1である。

それでは、3つの<カテゴリー>ごとに結果をみていく。

4-1. 支援前における揺らぎと事前学習での学び

2011年3月11日の震災発生時、インタビュー対象者の多くが障害者施設で支援にあっていた。職場や自宅でテレビから被災状況を伝える映像をみて、今回の震災の被害の大きさを知り、【震災の映像によるショック】を受ける一方で、「まるで映画をみているようだ」といった「現実

として受け止めきれない」という語りもみられた。ただし、テレビやインターネットから流れる映像により、「被災地支援に行かなければ」という【支援への決断】をおこなっている語りもあった。【支援への決断】に関しては、施設の管理職や所属する障害者団体の役員としての立場から「自分たちが率先して行かなくてはならない」という思いを持ったという語りもみられた。

【震災の映像によるショック】が【支援への決断】となった一方で、【支援への不安】も生み出していた。不安の中でも「被災地に行って自分に何ができるのか」といった不安や一週間の派遣中の家族や職場に対する不安がみられた。また、支援中の被災地での宿泊場所や活動、持ち物など目まぐるしく状況が変わる中での情報不足による不安も語りの中からみられた。

支援に向かう日程が迫るにつれて、【支援への決断】としての支援に行きたい、行かなければという思いと【支援への不安】との間で葛藤を語りから確認することができる。このような支援前の外部支援者の揺れに対して、被災地支援に関する事前教育を受けたことによって【事前教育の学び】を言葉にする語りもみられた。また、学習会を通じて改めて、職場や家族に加えて、JDFといった組織から外部支援者として送り出されていることによる【送りだされる安心感】を高めていた。

4-2. 被災地での揺らぎと向き合い、外部支援者としての思い

被災地に支援に入った際には、被災状況を目の当たりにすることで、【被災地をみたショック】を受けていた。また、障害者施設の外部支援として、障害者の安否確認のための自宅や避難所の訪問活動や、関係事業所と自治体との間での調整、または再開された障害者施設に支援者として入るなどの活動を通じて、被災者と話し、【命との向き合い】をおこなっていた。また遺体

安置所や、津波の被害に遭った海岸線といった場所を目にすることによって、普段、感じることもないレベルで、「命」や「死」について、考え、向き合っていた。この【被災地をみたショック】や【命との向き合い】といった外部支援者自身が気持ちの変化を経験する場面がある中で、被災者との会話や、日常の様子をみる中で【被災者の優しさ・たくましさの発見】をした語りもみられた。これは、外部支援者自身が励まされたものとして語られている。また、【事前教育での学び】に実際の被災地での活動で経験したことが加わることで【外部支援者としての思い】を固めていった語りがみられた。これは、事前教育の内容を確認するためのものでもあり、また、外部支援者として心がけなければならないことを自分自身で見出す行為でもあった。さらに、1週間の活動の中で【被災地をみたショック】や【命との向き合い】といった精神的な変化に対して、家族や職場からの電話などによって【送り出される安心感】があったことも多く語られた。

4-3. 帰任後の揺らぎと日常への育ち

1週間の支援活動を終えた外部支援者が帰任する際には、多くが「このまま帰ってもいいのか」という【帰任への思い】を抱いていた。1週間という期間の中で自分たちがおこなった支援活動を振り返り、「何もできなかったのではないのか」という【帰任への思い】を強める者も多かった。さらに、支援活動をおこなった被災地から、自分が住んでいる居住地に帰任してきたときに【日常と非日常のギャップ】を感じ、大きく気持ちの変化を経験している語りもみられた。これは、被災地では、食事や生活も制限される部分があり、また、避難所などで生活している被災者の姿をみている外部支援者が、帰任後に自らの日常に戻った際、大きなギャップを感じたということである。しかし、この【帰任への思い】や【日

常と非日常のギャップ】といった経験を、日頃、自らが行っている障害者福祉施設での支援実践や、生活そのものに学びとして生かしていこうとする【日常への学び】が語られた。

5. 考察

それでは、インタビューの結果を受けて、外部支援者たちが経験した揺らぎと育ちに注目して実際のインタビューでの語りを紹介しながら、大規模地域災害が発生した際のノンプロ外部支援者へのケアについて考察を加える。また同時に、先述した筆者らが実施した取り組みの効果と課題をインタビューの語りから整理して、検討をおこなう。

5-1. 外部支援者が語る揺らぎと育ち

今回、インタビューに協力してもらった外部支援者は日常、それぞれ障害者福祉現場での支援実践にあたっているが、災害支援の中では非日常的な感情の変化を体験している。この変化は、これまで惨事ストレスの要因のひとつとして捉えられてきたが（Stamm, 1995 など）、ここからは、尾崎（1999 前出；2000 前出）がソーシャルワーク論の中で指摘する「揺らぎ」として捉え、考察を加えていく。

尾崎（1999 前出；2000 前出）は、ソーシャルワーク実践の本質として、「さまざまな挫折や葛藤、社会の矛盾や変動と関わるなかで、援助者も迷い、悩み、葛藤する」ことを「ゆらぎ」と述べ、取り上げている。さらにその意義を4点に分け、①「ゆらぎ」に向き合う力は関わりを育て、深める力である。②「ゆらぎ」は援助にしなやかな視点・発想を導く基礎である。③「ゆらぎ」は関わりにおける他者性を自覚する基礎である。④「ゆらぎ」は社会の構造や仕組みを見通す力の基礎である。と示している。つまり、ここで指摘される揺らぎの経験とは、他者を支

援する際に生じる迷いや、悩み、葛藤である。さらに揺らぎの経験は、経験者の成長の契機でもあるという点で大きな意義を有している。今回、ノンプロ外部支援者に対する支援前後ケアを検討するにあたって、被災者への支援を通じた揺らぎの経験が、どのように成長の契機となるのかを、成長を育ちと表現し、インタビューでの語りをみていく。

今回のインタビューで外部支援者が体験した揺らぎを整理してみると、支援前は、「自分に何ができるのか」という漠然とした揺らぎに加えて、情報不足からの揺らぎ、そして家族や職場に理解を得ることができるかに対する揺らぎをみることができる。支援中には、実際に被災地を目の当たりにすることによる揺らぎ、「自分たちは何をしにきたのか」という役割喪失による揺らぎ、そして実際に被災者の語りを聞いたときの揺らぎなどがあつたと整理できる。そして支援後には、「このまま帰ってもいいのか」という帰任に対する揺らぎや、非日常から日常に戻ったときの揺らぎをみることができた。

それでは、実際に被災地での支援活動の中で何らかの揺らぎの経験をした支援者の語りから、揺らぎの経験がどのように成長の契機となり得たのかをみていく。

ある利用者さんの支援をしようといったって、例えば一生懸命その人のこと、何から何までその職員がやればいいわけじゃなくて、やっぱりそれは、当事者はその人であって職員ではないはずなんです。そのスタンスというのは福祉の部分であっても、震災の支援でも一緒なのかな。職員が何とかしなきゃという使命感と義務感だけでやっていくと、一番大事な本人さんの思いとかニーズとか、福祉的なところではそういうものを見失いがちにもなるし、震災支援にしても一緒ですよ。

上のように語った支援者は、人手不足などの

問題を抱える被災地の障害者施設の職員と話す中で、揺らぎの経験をしていた。しかしながら、被災地支援という非日常的な体験を通して、普段の支援実践を振り返っている。これらの語り中では「使命感と義務感」だけでの支援の危険性を指摘している。さらに、ソーシャルワーク実践におけるクライアントの自己決定の重要性 (Biestek, 1957) について被災地支援を通して獲得、又は再確認し、自らの日常のソーシャルワーク実践の向上へとつなげていることが伺うことができる。

現地支援は決してね、現地に行かないとできないものではないなというのは、やっぱり「ここにも、何かできることあるはずや」というふうには思っただけで、それは何かわからないですけども。ちょうどね、(障害者団体で) 取り組んでいた国会誓願署名とかは5月に提出なので、最後の追い込みの時期だったこともあってね、そういった制度的に署名なり訴えて変えていくというのも、そういった現地の復興につながっていくだろうし。

上の語りもまた、被災地支援を通じて、日常での活動へのモチベーションへとつなげていることがわかる。ソーシャルワーク実践では、利用者の生活課題に向き合い、解決していこうとする中で、既存の制度・政策を発展させていく働きが求められる (Butrym, 1976; 植田, 2011)。被災地支援を通じて、自らの普段のソーシャルワーク実践が社会体制に影響を及ぼさうという視点を獲得、また再確認することは、日常の支援に重要なものとなったと考えられる。

このように被災地での揺らぎの経験を通じて、外部支援者たちが普段のソーシャルワーク実践の視点の獲得、また再確認という育ちの経験をしていることがわかる。

さらに、今回の調査対象者は他者の生活を支えるという点において、被災地での支援と普段

の障害者支援との間で共通点を見出し、「クライアントの自己決定」や「社会体制への働きかけ」といったソーシャルワークの視点の獲得・再確認という育ちの経験をしている。彼ら・彼女らにとって被災地での支援活動は、災害支援の教育を受けていない「ノンプロ的な支援経験」であるが、その経験は他者をケアするという部分で多くの共通点があり、サラリーマンなどの他職種のノンプロ外部支援者とは異なった育ちの契機となっていることも指摘できよう。

5-2. 安心して揺らぐための事前教育

前述したように今回、被災地支援における教育を受けていないノンプロ外部支援者に対して事前教育のためにテキストを作成し、災害支援に関する講義を実施した。その効果をインタビューの語りの一部を紹介しながら確認し、外部支援者が被災地で安心して活動し、その中で揺らぎを経験するための事前教育、支援前のケアについて検討する。

まず、語りからは、事前教育によって被災地に入る前に抱えていた不安を解消することができたとするものがみられた。

例えば「寝れなかったりとか、思い出してしまったりするのもごく当たり前のことなのです」というふうに書かれているのと、それが無いというのは心持ちが全然違うなというふうには思ったので、手引きってすごく、そういう意味では大事ななというふうには思いましたけど。

上の語りからは、被災地での支援活動の中で心身の変化に対して冷静に対処するための構えが事前教育によって可能となったことが確認できる。この他にも被災地支援では、これまでに体験したことのないストレスをうける可能性があり、事前にそれを知っておくことで積極的に休憩をとることができたとする語りもあった。

すごく何か上がった状態で行ったので、「自分是可以する」、「自分は何かできる」っていったので、誰でもそういうふうには、上がった状態で行っても仕方ないし、誰でもつまづくわけじゃないですけども、ダメージを受けるというの聞いて、それ最初に聞いていたからよかった。聞いて、何かふっと軽くなったところはありましたね。

上の語りには、支援前に「自分は何かできる」という高揚感と気負いがあったことが語られている。加藤（2006）によれば、この高揚感や気負いは災害救援において生じやすく、またそれは支援活動に支障をきたす場合もあることが指摘されているが、メディア報道によって支援活動の決断をするなどのノンプロ外部支援者はよりその高揚感や気負いが不自然に高まっていたことが想定される。また、今回の調査対象者は障害者福祉施設の職員であり、普段から他者の支援に従事しているという点がさらなる高揚感や気負いを高めた可能性も指摘できよう。ただ、今回の事前教育を通じて、自身の高揚感や気負いを客観視し、支援活動に入ることができたと考えられる。

次に、ノンプロ外部支援者が被災地で経験する揺らぎを育ちにつなげていくためには、安心して揺らぐことができる体制を支援前に整えておく必要がある。今回のインタビューからは、【送りだされる安心感】という概念が生成されたが、家族や職場、そして組織から送りだされている安心感を支援者が感じることは育ちへの転換に大きくかかわっている。

本当に法人として、やっぱり代表で行ってもらおうという、うちはそういうふうな対応してくれたんですよ。何かすごく気持ちよく行かせてもらえたり、帰ってきてからも、全然、本当に、ああ、行ってよかったなと思わせてもらったんですけども。

例えば、上の語りのように職場からの「代表で行ってもらおう」という形で支援活動に入ることによって大きな安心感を得ることができる。これは、帰任後にも支援者の育ちを大きく支える要素でもある。また、組織から継続的に派遣されることによって、「自分が何とかしなくてはならない」という思いを軽減させることも可能であり、また家族や職場の同僚から励ましの連絡があることも大きな安心を生み出していた。尾崎と共に支援実践において揺らぎの経験の重要性を指摘する白石（2009）は、揺らぎの経験を保障する職員集団がなければ、支援者が仕事の意味を失い、孤立化していくことを指摘し、『「ちょっと揺れるかもしれないけれど、みんなで受け止めるから大丈夫だよ」といえる職場集団」が重要であると述べている。ノンプロ外部支援者にとっては、白石が指摘する職場集団の見守りによる安心感と同じような、送り出される安心感をどのように確保し、揺らぎの経験を保障することができるかが重要であろう。特に災害支援の専門職と異なり、普段、別の業務を持ち、それを置いて被災地に入るノンプロ外部支援者にとっては、家族や職場からの理解が、支援者の精神的な状態を大きく左右することとなる。支援前には、家族や職場への理解を徹底して促すことが重要となる。

5-3. 揺らぎを育ちにつなげる事後ケア

最後にノンプロ外部支援者が、被災地での支援活動を通じて経験した揺らぎを育ちへとつなげるために、帰任後の事後ケアを検討する。

まず、今回のインタビュー対象者は被災地では1週間の活動であり、そのときに体験した揺らぎも事前学習での惨事ストレスへの理解によって自己対処が有効におこなわれた。しかし、インタビュー結果にある【日常と非日常のギャップ】にみられるように、帰任後に落ち着いて支援を振り返る時間を持った際に、大きな精神的

な揺らぎを経験していることが明らかになった。

帰ってきてからも、帰ってきて当日じゃなくて、帰ってきて2日後の晩に、家で泣いていたかなという感じがありますね。布団に入って横になっていたら何となくというふうな感じですかね。多分、今も何かしらその、一番最初に来たのが、あれですね、簡易のお風呂みたいな形になっていたところが、何か最初のイメージでは、がんと来てからいろいろと。ここから泣いていたかな、ちょっと泣いていたなという感じではありましたが。

例えば、上の語りのように帰任後の休職期間に、支援活動を振り返り、涙を流すという語りがこの他にもいくつかみられた。揺らぎの経験を育ちへとつなげていくためには、この揺らぎの経験を受け止め、整理する時間が必要である。今回は、被災地支援からの帰任後、およそ一週間の休暇をとるように促したが、ノンプロ外部支援者にとっては、この帰任後の休暇が身体を休ませるだけでなく、揺らぎの経験を受け止める時間として有効となる。ノンプロ外部支援者への支援後ケアとして、休暇をしっかりととり、フォローをおこなっていくことが重要である。

次に事後ケアについてインタビューでは、自分たちがおこなってきた活動を振り返る時間をよりもっと多くとりたかったという語りが多く、また事後ケアを講義形式で受けるだけでは、支援活動を振り返り「少ししんどくなった」という語りもみられた。今回のインタビュー対象者のほとんどが1週間の支援活動について「思ったよりもストレスなく帰任した」と語っているため、帰任後のケアのために設置した相談窓口には、相談はなかった。しかしながら、今回筆者らが実施したインタビューについては、「話をする機会があってよかった」や「向き合うことができてよかった」といった語りのみであったことから、帰任後のサポートについては、外

部支援者間のコミュニケーションを保障する体制を整える必要がある。しかし、惨事ストレスマネジメントにおけるグループ技法である心理的デブリーフィング⁴⁾については、その有効性が議論されており(松井・畑中, 2003など)、慎重に検討する必要があるだろう。

最後に、経験した揺らぎを受け止めた後、それを育ちとして確認、自己評価する場がノンプロ外部支援者には特に必要である。今回インタビューした支援者の中には、帰任後、職場での報告会があり、おこなってきた支援活動を報告する場に出た支援者もいたが、このように外部支援を無理なく言語化することも、自らの揺らぎの経験を整理し、育ちの側面を確認する作業を可能とするものであると考えることができる。

6. おわりに

今回、ノンプロ外部支援者が被災地支援において受ける感情の変化やストレス要因をソーシャルワーク論における揺らぎとして捉えて分析をおこなってきた。そして、ノンプロ外部支援者が経験する揺らぎが、育ちの契機となるための支援体制のあり方を検討した。

本稿の検討によって見出された支援体制の視点は大きく2点である。1点目は、外部支援者が安心して揺らぎを体験することのできる体制を整備することである。このためには、支援前の事前学習や、事後ケアを保障することに加え、外部支援者を送り出す側である家族や職場の理解が重要となる。2点目は、帰任後に落ち着いて支援を振り返る際に生じる揺らぎをサポートすることによって育ちの契機となるとい

4) 心理的デブリーフィングは、惨事を体験した人々が、2, 3日(少なくとも1週間)後に行うグループ技法であり、出来事の再構成、感情の発散(カタルシス)、トラウマ反応の心理教育などが行われる。しかし、1990年代以降、この有効性が疑義されるようになっていたため、今回、筆者らでは、帰任後のグループワークは実施しなかった。

うことである。このためには帰任後に、揺らぎを受け止めるに十分な休職期間を求めること、そして、体験した揺らぎを無理なく言語化する場を保障することが重要である。特に、今回の対象者は、障害者のある人への支援実践に従事しており、それゆえに災害支援の経験を普段の支援実践にいかしていることが語りから確認された。この点は、一般的な災害ボランティアと異なる点として指摘することができる。

最後に、本稿の限界を挙げる。今回のインタビュー調査で対象としたのは震災発生後から4か月以内に被災地に入った支援者であった。この時期は、被災者の心理状況としては「ハネムーン期」と呼ばれる被害の回復に向かって積極的に立ち向かい、愛他的行為が目立つ時期にあるとされている（岩井，2006）。そのため、この時期に被災地に入った支援者の心理状況もこれに何らかの影響を受けたことが想定される。

本稿では、大規模地域災害時において外部支援者を派遣する際の支援体制をソーシャルワークの視点を応用し、検討したわけであるが、この検討は様々な視点から進められていくべきである。東日本大震災から2年を経過した今なお、復興に向けて支援は続いている。支援活動が一時に終わることなく、被災地の求めに合わせて外部支援者が派遣されていく仕組みづくりをおこなっていくためにも本研究がその一助となるよう研究を継続させていきたい。

謝辞

本稿のインタビュー調査にご協力いただいた14名の障害者福祉施設の職員の方々にお礼申し上げます。

引用文献

Biestek, F. P. (1957) *The Casework Relationship*. United

- States of America: Loyola University Press. 尾崎新・福田俊子・原田和幸（訳）（2006）「ケースワークの原則 援助関係を形成する技法」. 誠信書房.
- Butrym, Z.T. (1976) *The Nature of Social Work*. United States of America: The Macmillan Press. 川田音音（訳）（1986）「ソーシャルワークとは何か その本質と機能」. 川島書店.
- 深澤佳代子・山田正実・石岡幸恵・佐藤和美・込田啓子（2006）新潟県中越地震の急性期看護に従事した看護師のメンタルヘルスに関する研究 - 震災後10カ月間の心理的回復過程に焦点を当てて -. 新潟県立看護大学看護研究交流センター年報, 17, 21-30.
- 岩井圭司（2006）自然災害（総論と災害前準備）. 金義晴（編）「心的トラウマの理解とケア 第2版」. じほう.
- 加藤寛・飛鳥井望（2003）災害救援者の心理的影響 - 阪神・淡路大震災で活動した消防隊員の大規模調査から -. *トラウマティック・ストレス*, 2 (1), 7-12.
- 加藤寛（2004）災害救援者と惨事ストレス. *臨床心理学*, 4 (6), 753-757.
- 加藤寛（2006）災害救援者. 金義晴（編）「心的トラウマの理解とケア 第2版」. じほう.
- 木下康仁（2003）「グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い」. 弘文堂.
- 松井豊・畑中美穂（2003）災害救援者の惨事ストレスに対するデブリーフィングの有効性に関する研究展望1. *筑波大学心理学研究*, 25, 96-103.
- 三井さよ（2008）「人として」の支援 - 阪神・淡路大震災において「孤独」な生を支える. 崎山治男・伊藤智樹・佐藤恵・三井さよ（編）「＜支援＞の社会学 現場に向き合う思考」. 青弓社.
- 中井久夫（編）（1995）「1995年1月『阪神大震災』下の精神科医たち」. みすず書房.
- National Child Traumatic Stress Network and National Center for PTSD (2006) *Psychological First Aid: Field Operations Guide, 2nd Edition*. United States of America: Management Books 2000 Ltd. 兵庫県こころのケアセンター（訳）（2009）「サイコロジカル・ファーストエイド実施の手引き第2版」. 医学書院.
- 似田貝香門（編）（2008）「自立支援の実践知：阪神・淡路大震災と共同・市民社会」. 東信堂.
- 大澤智子（2010）国際緊急援助隊の惨事ストレスとその影響について. *心的トラウマ研究*, 6, 63-73.

- 大澤智子・中島聡美・村上典子 (2011) 東日本大震災における悲嘆反応と支援者ストレス：3か月後の現状とこれから. *トラウマティック・ストレス*, 9 (2), 158-164.
- 尾崎新 (編) (1999) 「ゆらぐことのできる力 ゆらぎと社会福祉実践」. 誠信書房.
- 尾崎新 (編) (2000) 「現場のちから 社会福祉実践における現場とは何か」. 誠信書房.
- 清水裕 (2000) 災害時における援助とサポート. 高木修 (監)・西川正之 (編) 「シリーズ 21世紀の社会心理学 4 援助とサポートの社会心理学」. 北大路書房.
- 白石恵理子 (2009) 発達と教育年齢. 白石正久・白石恵理子 (編) 「教育と保育のための発達診断」. 全障研出版部.
- Stamm.B.H (1995) *Secondary Traumatic Stress: Self-Care Issues for Clinicians, Reserchers, and Educators*. United States of America: The Sidran Press. 小西聖子・金田ユリ子 (訳) (2003) 「二次的外傷性ストレス 臨床家, 研究者, 教育者のためのセルフケアの問題」. 誠信書房.
- 植田章 (2011) 「社会福祉援助実践の展開 相談援助の基盤と専門職」. 高学出版.
- 山本耕平 (2007) フィールド便り トラウマケアとソーシャルワーク - 実践からの学び -. *トラウマティック・ストレス*, 5 (1), 74-77.
- 山本耕平 (2008) フィールド便り 精神科ソーシャルワークとトラウマ. *トラウマティック・ストレス*, 6 (2), 106-108.
- (2012. 7. 18 受稿) (2013. 1. 8 受理)